

第2回エコ学習コンクール「講評」

金沢大学附属図書館長・柴田正良

平成25年11月3日

みなさん、こんにちは。昨年度に引き続き、第2回エコ学習コンクールの審査委員長を務めました、金沢大学附属図書館長の柴田正良と申します。

今回、受賞された方々には、まことにお目出とうございます。

今年の夏は暑かった！ その夏の最中でのみなさんの努力は、総数で昨年をやや上回る多くの応募作品のなかでも大変優れた作品であるという、審査員のみなさんの評価となって報われました。

今回、応募頂いた作品の総数は、小学生部門が34作品、中学生部門が27作品ありました。今年作品でとくに印象的だったことは、水や食品やゴミや夏の冷房といった身近なテーマと、一昨年の福島原発事故以来、注目を浴びている再生可能な新エネルギーを身の回りで調べるといったテーマが、目立ったことでした。とくに、身近な生活の一コマが大きな地球の営み、大気循環や物質循環に組み入れている、というイメージがみなさんの作品からはとても強く伝わってきました。こうした視野の広がり、未来の科学者の視点を感じさせるもので、みなさんの素晴らしい明日を感じることができました。

個々の作品にあえて言及することはいたしません。調査を主にした作品、実験を主にした作品、その二つを組み合わせた作品など、それぞれの受賞の理由は違いますが、受賞した作品には一つの共通点があります。それは、その人なりの感じ方で問題を「はてな？」ととらえ、次に「本にはこう書いているけど、どうかな？」と考え、そして、「こんな風に見えるから、こう確かめたらいいんじゃないかな」と進んでいることです。そこには、その人にしかない疑問の持ち方があり、他の人とは違うその人なりのこだわりがあります。大事なことは、みんなと同じやり方で同じ結論に達することではなく、自分はみんなとどう違うのかという点です。些細であっても、その違いを大事にしたかどうか、審査の分かれ目になったように思います。

独創性やオリジナリティーと私たちはよく言いますが、実は大学生や大学の先生たちだって、そんなにいつもユニークな考えを思いつけるわけではありません。一つの仮説に辿り着くまでには何百もの捨てたアイデアがあり、何百もの失敗があります。ですから私たちも、みなさんの作品から、「自分なりのこだわり」を大事にする勇気を改めてもらいました。みなさんには、心からのお祝いと同時に、心からの感謝もお伝えしたいと思います。

さて、最後ですが、このコンクールのきっかけは、日産自動車さんからも支援していただき、平成 22 年度からこの自然科学系図書館の 2 階に設置いたしております「環境学コレクション」の利用拡大にありました。私たち、金沢大学附属図書館は、このコレクションの充実を通して、環境に関する教育と研究を支援し、地域のみなさまとのつながりをますます深めていきたいと考えています。

今後、このエコ学習コンクールが、地域の小中学校のみなさんにとって夢のあるコンクールとして育っていくことを念じながら、以上、はなはだ短くはありますが、私の講評とさせていただきます。

本日は、みなさま、まことに有り難うございました。